

# Chap.13 新しい建物の傾向

## § 13.1. 新しい形式一概観



建て替えや増改築が進む通り

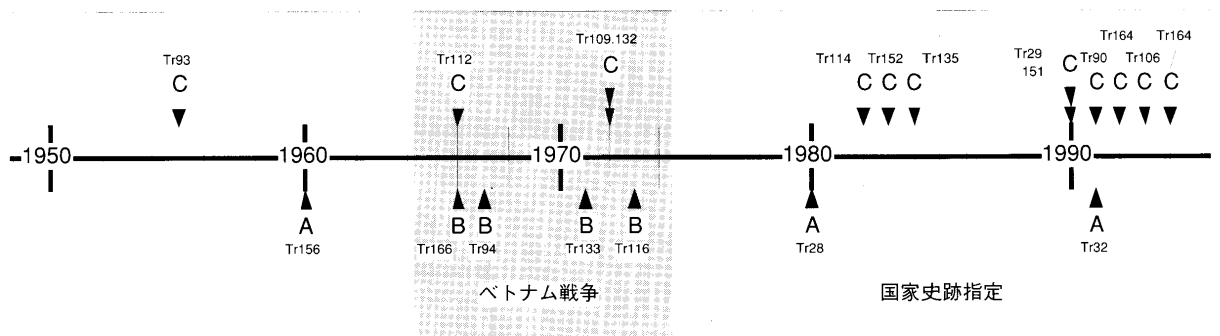
本章では、伝統的形式ではない建物を扱う。ホイアンでは、20世紀前半までは、チャンフー80番のような建物や、コロニアル様式の建物が作られていたから、その後の建物である。その移行期はおそらく、フランス植民地から解放された1940年前後であろう。もちろん、これはベトナムに限らない世界的な傾向にそったものである。調査では、聞き取りによれば1960年前後以降の建物が採集された。これら住宅は伝統的建物とどのような点が異なるか、それはどのような建物への要求から生まれたものか。問題点は何か。

どんな建物があるか、まず外観から概観してみよう。一見して分かる共通した特徴は、1階建ての場合を除いて傾斜屋根がないか見えないことである。傾斜屋根があっても見えないのは、前面に軒の代わりに鉄筋コンクリート造の水平の庇が回っているからである。また、ベランダを設けているものが多い。

構造を見ると新しい建物は、躯体が煉瓦または鉄筋コンクリート造である。屋根は、フラットルーフの場合と、木造で小屋組をつくり瓦を葺いた傾斜屋根の場合がある。これを建築年代で見ると、後者は1960年から現在まで作られてきたが、前者は1964年～75年と期間が限られている。壁を煉瓦等にし、瓦屋根を載せるのは、ベトナムでは都市、農村に限らず今でも一般的である。ホイアンではさらに瓦屋根を載せるという建築指導（後述）が行なわれていることも一因であろう。

フラットルーフの建物には凝った建物、堂々とした建物が多い。少数だが、3階建ても存在する。いずれもベランダやルーバーが目立つ、デザインの凝った「近代建築」である。しかし建築年代は、前記のようにベトナム戦争以前である。

改築には、敷地全体を新しく建て替えた場合と、建物の一部（たとえば前家だけ）を建て替えた場合とがある。前者では古い構造物に規定されることなく「理想的」な建物が建設されたと言えよう。以下では、この全面改築と前家の建て替えのふたつにわけて考察を進める。



- Type-A. 全体的な改築で、屋根の一部分を木造の傾斜屋根とした混構造の住宅 ..... Tran Phu 28.32.128.156
- Type-B. 全体的な改築で、フラットルーフのRC造住宅 ..... Tran Phu 94.116.118.133.166, 86
- Type-C. 部分改築で、RC（又はレンガ）と木構造が混在 ..... Tran Phu 29.87.90.93.106.109.112.114.132.135.151.152.164

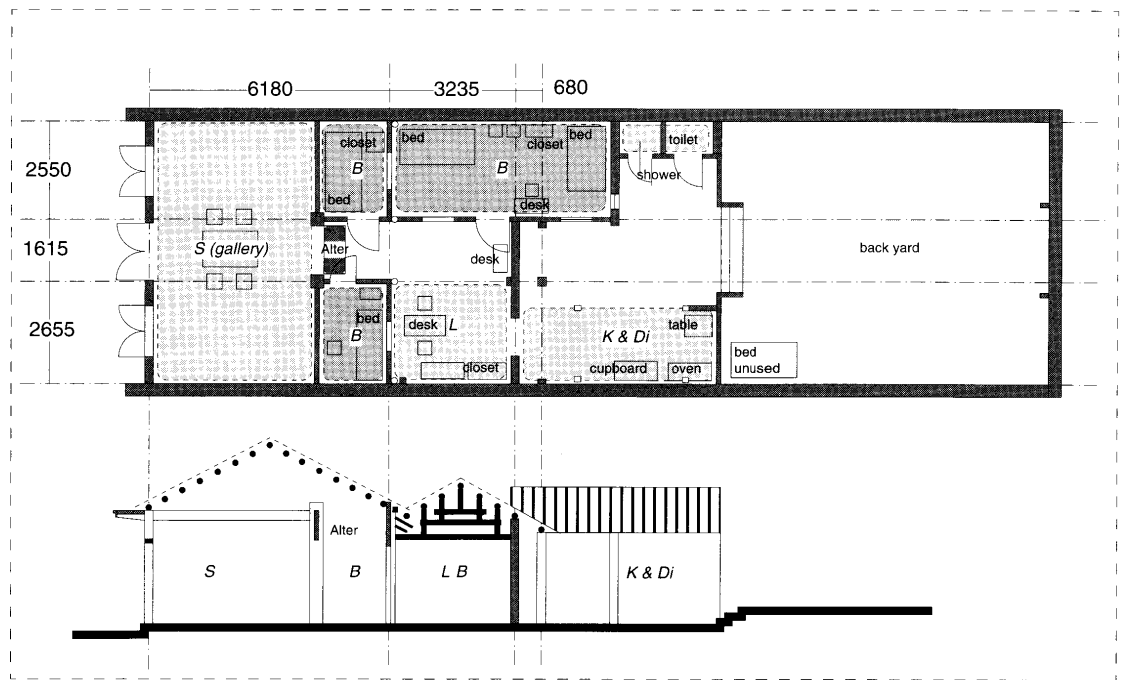
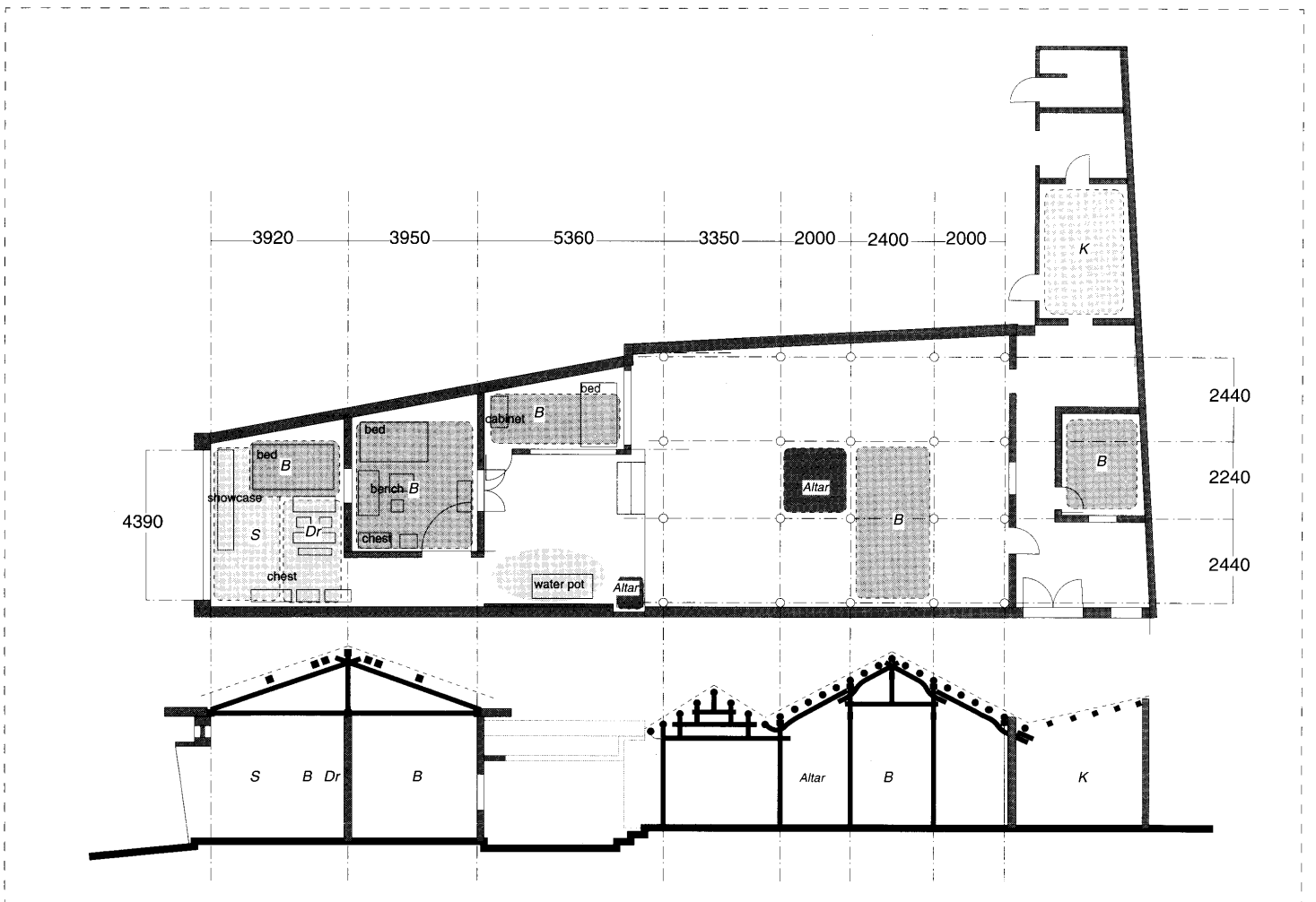


Fig. 13.1: 1階建ての前家を改築した建物 (Tran Phu 109)

Fig. 13.2: 1階建ての前家を改築した建物 (Tran Phu 132)

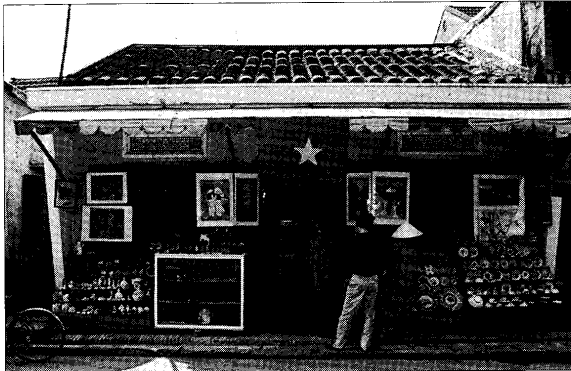


## § 13.2. 部分的な改築をした住宅とその生活

部分改築の事例から見ていく。部分改築と前章の改造・増築とは区別の難しいところもあるが、ここでは前家を丸ごと改築したものを取り上げる。確認できた部分改築の事例は前家1階建てが8例(子棟を2階建てにした1例を含む)、前家2階建てが3例、後3家1階建てが2例、橋家が1例の計14例ある(Tran Phu 152は1軒で前家・橋家・後3家の計3例の事例をもつので実際は12軒)。改築の部分と規模で分けてそれぞれの生活の傾向を考察してみよう。

### 13.3.a. 前家1階建ての改築 (Tran Phu 112.132.109.114.152.29.164)

#### • Tran Phu 109/1972



Tran Phu 109正面

子棟を残したまま、親棟のみを建て替えた例である。家族は7人。夫婦(夫44歳、妻42歳)を核に、祖父および子供4人という家族構成。後ろ家はない奥行き小さい敷地である(現在はタイホック通り側の所有者から購入)。従って、前家と橋屋に就寝空間を確保する必要がある。

新しい前家は母屋構造で室内に屋根を支える柱はない。しかし、伝統的な3×3を受け継いだ構造及び空間構成で、第3列に相当する部分に柱と壁を設けて、第1、2スパンと第3スパンを分けている。空間的には第2列の柱が省略された格好である。第3スパンは両側壁側に寝室が設けられている。

正面は、中央に出入り口を設ける伝統的な3スパン構成が守られている。軒の代わりにコンクリートスラブの庇が設けられている。

#### • Tran Phu 132/1972



Tran Phu 132正面

比較的敷地の奥行きがあり、伝統的な後ろ家を残して、前家だけを建て替えた例。後ろ家に子棟が付属するが、前家にはなかった模様。雑貨店を営むが、家族が18人ときわめて多い。店舗部分も含め、前家も就寝空間に使われている。

前家は奥行き方向のちょうど中央に柱を兼ねた壁をもつ。屋根はトラスが組まれている。後ろ半分が個室、前半分が店舗であるが、店舗にもベッドが置かれる。伝統的な3×3よりは室内の柱が少ない。また、動線はもはや建物の中央ではない。正面はシャッターが全面的に開閉する式。

\*\*\*

以上の事例から、新築建物については、入り口の位置、屋根の構造と柱配置、住み型(動線、個室、就寝)が伝統的建物との関連から気になるところだ。そこで、その他の例についても整理してみた(表14.1)。

表4-5は上から時代を追って並べたものである。入口を見てみると、中央に出入口があるのはTran Phu 109, 112, 152(152はデザインは非対称)でほとんどがシャッターないしは非対称であることが分かる。それらはほぼ住宅内の動線と一致する。

Table 13.1: 前家1階建ての改築建物

家番号	デザイン		生活			
	入口の方位*	屋根構造	ファサードの材質	動線	個室	就寝
112	中央	登り梁と束2柱1本	レンガにモルタル	右	なし	間仕切りなし(後ろ1/3)
132	シャッター	登り梁と束1本	レンガにモルタル	右	あり(後ろ半分)	個室のみ
109	中央	母屋構造、柱1本	レンガにモルタル	中央	あり(後ろ1/3)	個室のみ
114	右	登り梁と束3本	レンガにモルタル	右	あり(後ろ1/3)	個室のみ
152	中央	母屋構造	レンガにモルタル	中央	あり(横1/3)	個室のみ
029	左	登り梁と束1柱1本	レンガにモルタル	左	なし	居間の中に就寝
164	シャッター	天井で見えない	レンガにモルタル	中央	なし	なし(全部店)

\* 通りから見た方位

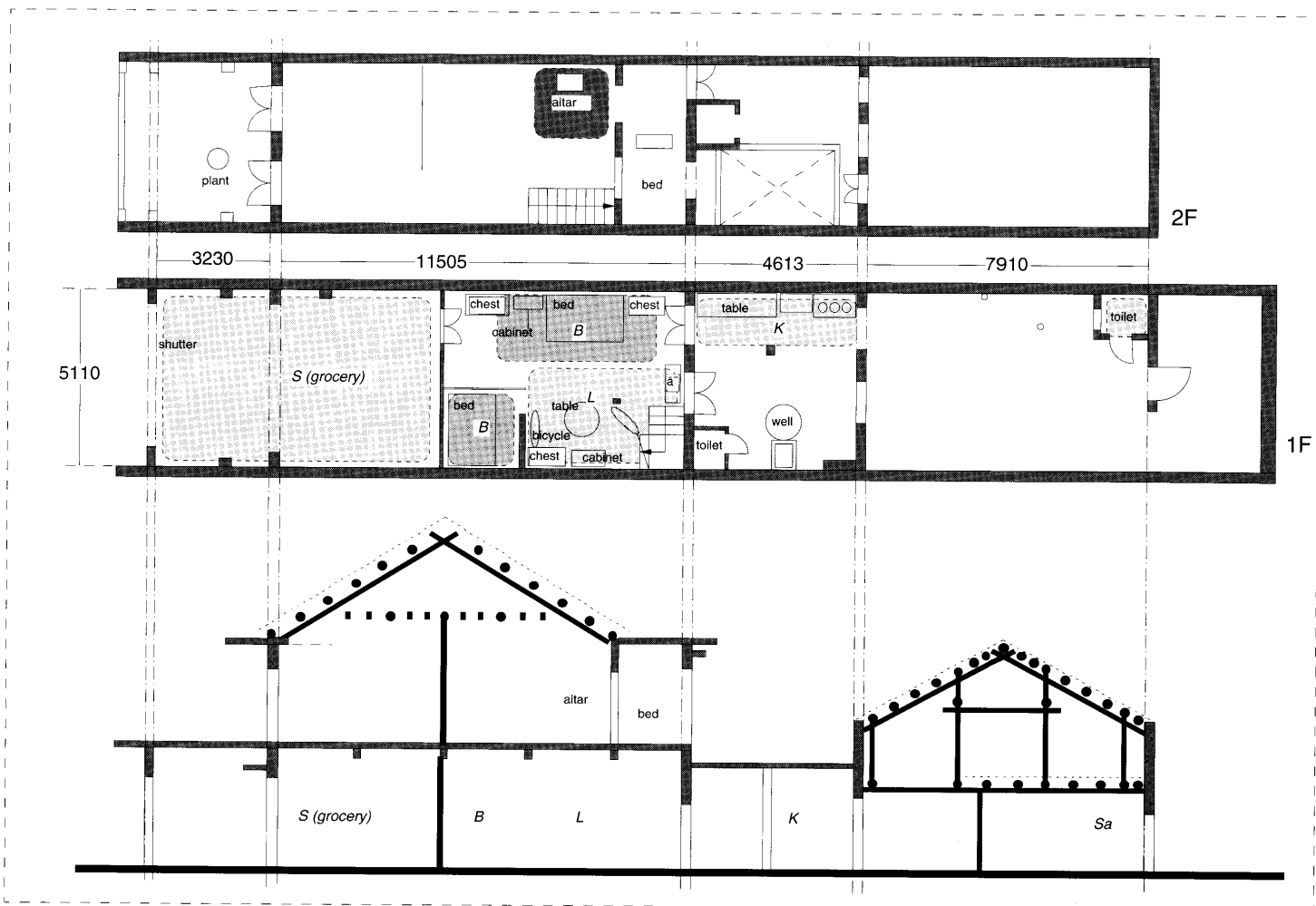


Fig. 13.3: 2階建ての前家を改築した建物 (Tran Phu 93)

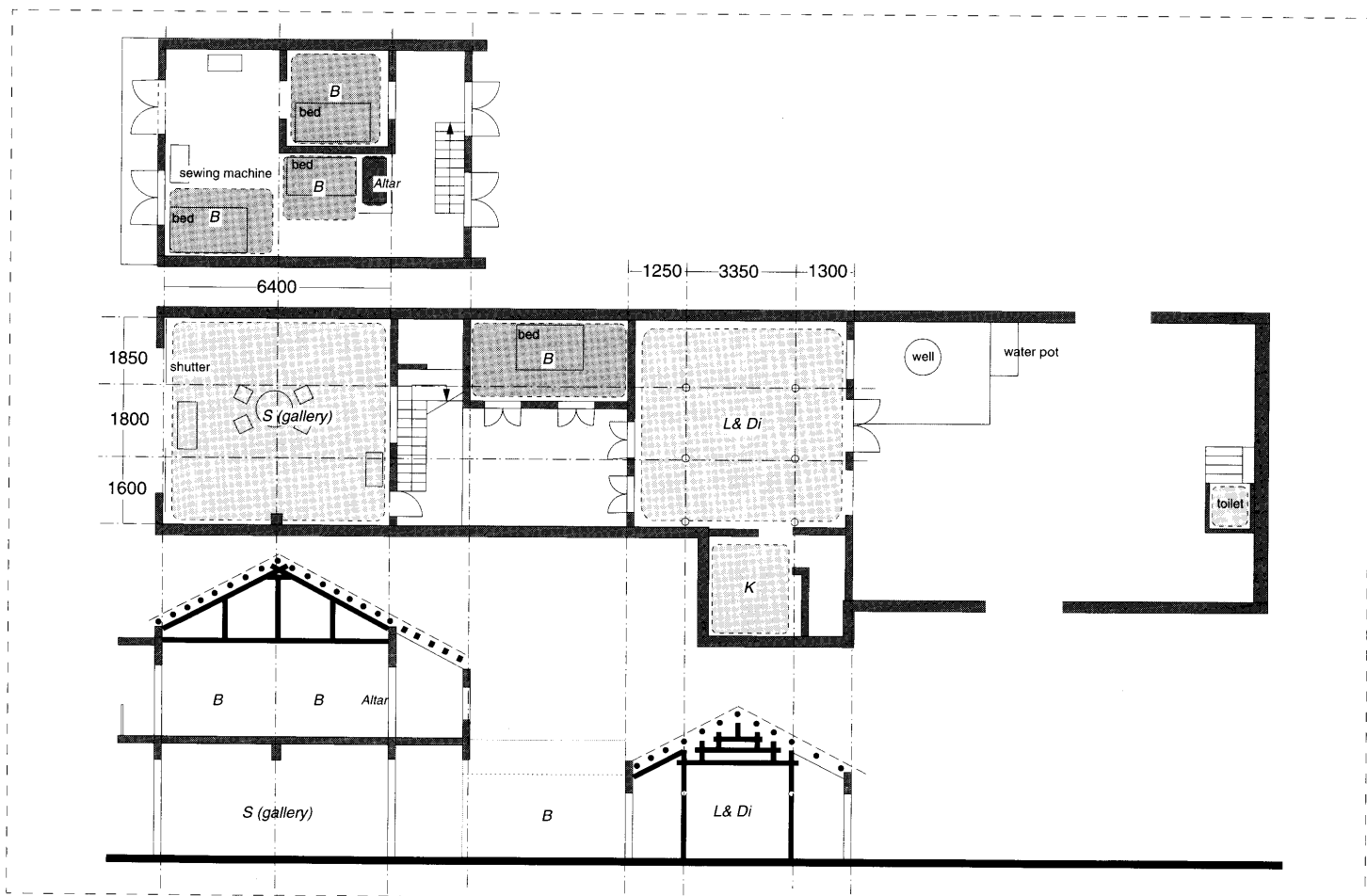


Fig. 13.4: 2階建ての前家を改築した建物 (Tran Phu 90)

柱は省略される傾向にある。伝統的建物と類似したプロポーションであるが、その第2列に相当する柱を省略した例が、7例中3例ある。第2列の柱を省略するのは、空間を柱に規定されずに自由に使うためと考えられるが、第3列の柱は、店舗と生活空間を分ける手がかりとして役立っているようにみえる。小屋組は一定していないが、装飾のない直線的な部材を使って水平に梁をかけ、その上に束を何本かたてて、更に登り梁をかけるというのが一般であり、改築住宅の中の共通点と言える。

### 13.3.b. 前家2階建ての改築

前家2階建ての改築事例は1955年のTran Phu 93、1991年のTran Phu 90、1993年のTran Phu 106の3例である。このうち新しい方からはTran Phu 90をとりあげて見てみよう。

#### • Tran Phu 93/1955

伝統的な2階建ての後ろ家を残したまま、前家が建て替えられている。2階のベランダが大きくとび出ているのが特徴だ。現在は雑貨店を営んでおり、家族は夫婦（夫34歳、妻32歳）に子供3人（11歳男、8歳男、1歳女）である。

前家1階は、前後に大きく2分されており、前半分（ベランダの下を含む）が店舗、後ろ半分が生活空間である。ここにはテーブルを中心にベッドが配置されている。簡単な間仕切りはあるが、個室にはなっていない（間仕切りのある方に親が就寝している）。生活空間はこの後ろ半分とそれに続く中庭（半分は2階のテラスで覆われている）に集約されており、前家の2階および後ろ家は日常的にはほとんど使われていない。前家2階には祖堂が置かれている。家族が少ないこともあるが、使い方は伝統的な建物の場合とよく似ている。

正面は1階が全部を開放できるシャッター、2階がベランダへ出る扉が片側へ寄った非シンメトリーである。

#### • Tran Phu 90/1991

これも後ろ家（1階建て）を残したままの建て替え。家族は夫婦（夫57歳、妻54歳）に子供5人（29歳男、26歳男、18歳男、18歳女、14歳男）である。店では絵画、彫刻などのギャラリーを営んでいる。

前家1階は全面的に店舗として使用、2階を寝室にあてている。2階は街路側を大きな部屋として奥側に個室を作ったこれまでもしばしば見られたタイプ。この個室はふたりの女性（母と娘）が使用している。ほかに橋家（1階建て）を長男が使用している。この前家のプランはTran Phu 106も基本は同じである。

正面の建具は1、2階ともTran Phu 93と同じである。

\*\*\*

ふたつの例はほぼ40年の差があるが、基本的にはよく似ている。ただし、古いTran Phu 93は1階での生活に重点があるようであり、新しいTran Phu 90, 106は2階を生活空間として積極的に活用することを前提としているように見える。



Tran Phu 93正面



Tran Phu 90正面

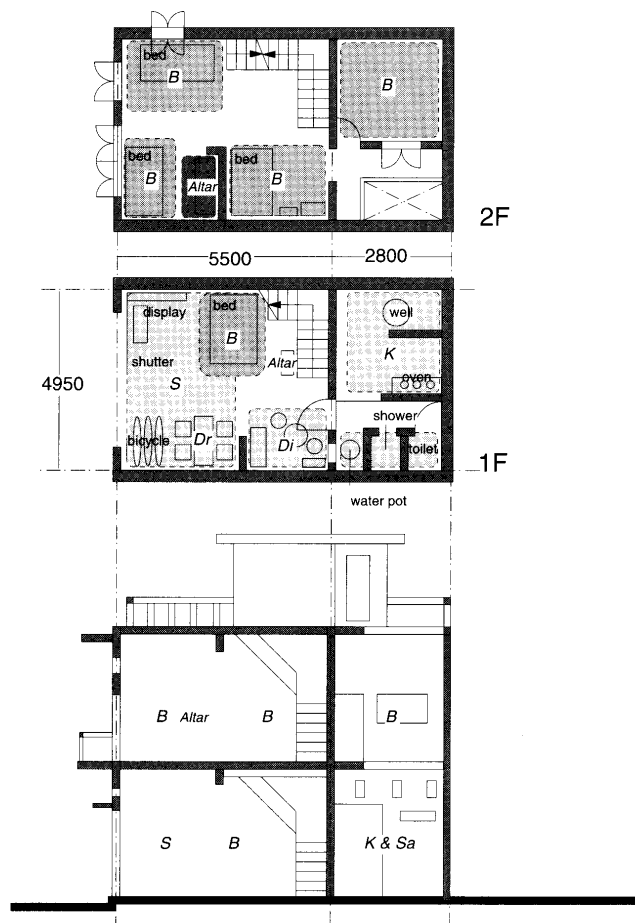


Fig. 13.5: 全建替え  
一敷地の小さい例  
(Tran Phu 94)

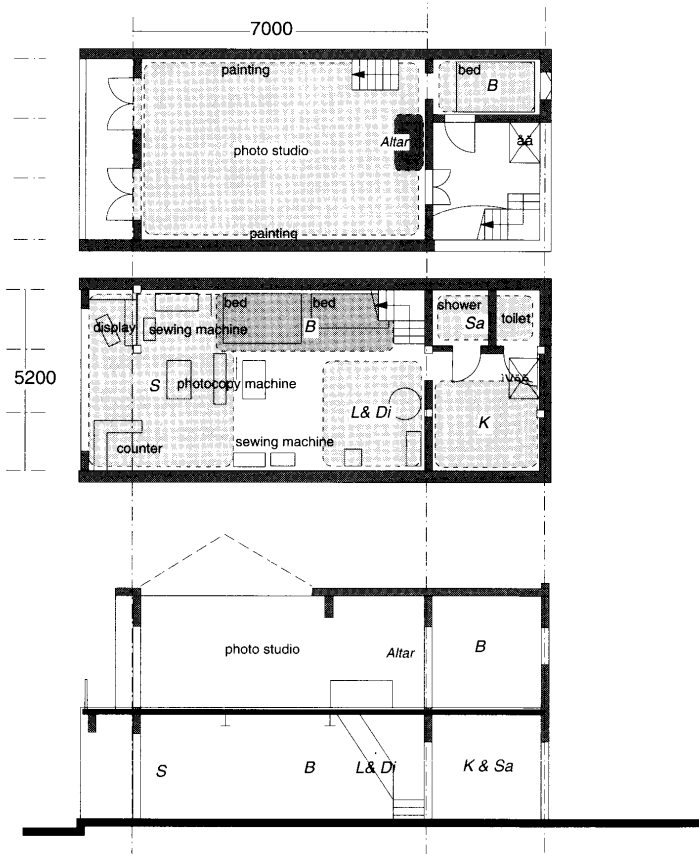


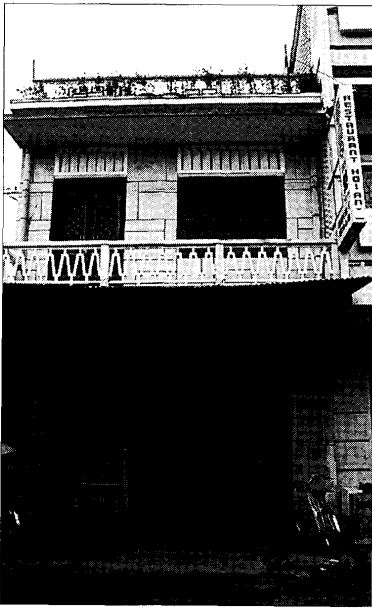
Fig. 13.6: 全建替え  
一敷地の小さい例  
(Tran Phu 28)

## § 13.3. 敷地全体を改築した住宅とその生活

まず、事例の観察から開始しよう。奥行き小さい敷地から見ていく。

### 13.3.a. 敷地の小さい例

#### • Tran Phu 94/1967



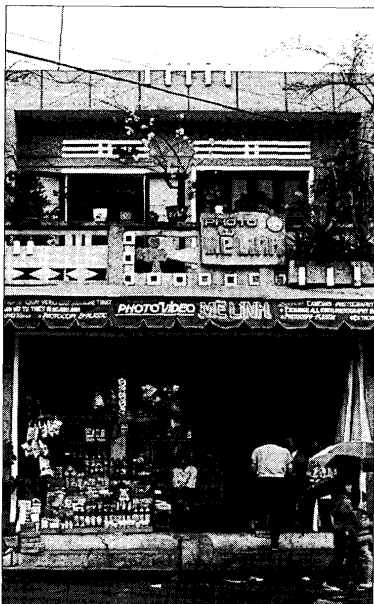
Tran Phu 94正面

奥行き 12メートルほどの敷地。建物は街路から3メートル以上後退して建てられており、建物自体の奥行きは8.5メートルほど。隣の古い建物である96番が街路に接して建てられているのと同対照的である。その理由は不明だが、右隣の3階建ての92番と同じ壁面の位置である。冠婚葬祭用の品を扱っている。現在は10人家族でかなり窮屈だ。主人夫婦（夫70歳、妻66歳）、その長女の家族（子供2人）、長男家族（子供3人）という構成である。

1階は、街路側から、店舗、居間（食事室）、台所と続く。台所部分には小さなコートがあり、そこに面してトイレやシャワーが設けられている。1階にはベッドも置かれ、おじいちゃんと孫が寝ている。2階には大きな部屋（一部間仕切りされている）と個室があり、大きな部屋側に長男家族、個室に主人の妻、長女など女性が使っている。このように2階が全面的に生活空間に使われている。主な祭壇も2階に置かれている。コンパクトなきわめて合理的なプランに見える。

正面は、1階が全面的に開放可能なシャッター。2階に1階の庇を兼ねたテラスがあり、建具はそこへ出る両開きのドアと、4枚開き戸をもった窓からなっている。ドアは伝統的建物のように中央ではなく、片側に寄せられている。これは部屋の間仕切りされていない方であり、2階の部屋の使い方を反映している。このように2階のデザインはシンメトリーでないが、この特徴は、以下の新築建物すべてに共通する。

#### • Tran Phu 28/1980



Tran Phu 28正面

これも敷地は12メートルほど。敷地いっぱいに建てられている。夫婦（夫50歳、妻44歳）に子供5人（26歳女、24歳女、21歳男、19歳女、14歳男）で、写真店を営んでいる。

プランは全体としては上記94番と似ている。台所とトイレとの間にヤードはないが、天井をくり貫いた換気及び採光のための穴が上まで通じている。2階は写真のスタジオで両側壁一面に背景に使う絵が描かれている。そのためか、2階の大きな部屋は寝室に使われておらず、小さな個室が主人夫婦の寝室となっている。その他の家族は1階で起居している。すなわち、1階の部屋は、街路側1/3だけを店舗に使い、その背後を居間、寝室等に使っている。2階のベランダを兼ねた深い庇が出ており、店舗はその下も利用している（戸締まりは、庇先で行なう）。祭壇は2階のスタジオに置かれている。

この建物の興味深い点は、柱や梁の配置に3×3の原則が使われていること、それによって使い方も規定されていることであろう。また、屋根の一部は瓦屋根である。他の例と同様、庇とパラペットによって、街路からはその屋根は見えない。なお、梁の一部には木が用いられている。

正面は新築建物の原則を踏襲している。ベランダの手摺のデザインがさらにシンメトリーを崩している。

### 13.3.b. 敷地が少し大きい例

#### • Tran Phu 156/1960



Tran Phu 156正面

この建物の敷地は15メートルほどあり、上記2例よりは少し大きい。店頭では雑貨店を、2階の奥では歯科医を営んでいる。敷地いっぱいひとつの建物が建てられている(増築されたものかもしれないが)。主人夫婦(夫70歳、妻70歳)、長男家族(夫39歳、妻39歳、子供2人)、次男家族(夫34歳、妻34歳、子供2人)の10人家族。

1階は前半分が店舗、後ろ半分は食事室等の生活空間として使われている。一番奥には小さなヤードと共に台所、便所、井戸がある。2階は、街路に面して居間がとられ(仏壇も置かれている)、その奥は東側壁沿いが廊下となって、個室が並んでいる。1階の台所の上部はテラスとし、竈の上だけ鉄格子穴で吹き抜けになっているが、現在は上部にトタン屋根をかけ、室内化している。

正面の構成は、新築建物に共通するパターンである。2階のベランダへ出る扉は、廊下の延長上に設けられており、2階の正面の対象性が崩れたのは、2階が居室として使われるようになり、個室を設けたことと関係があることが、より明瞭にうかがえる。

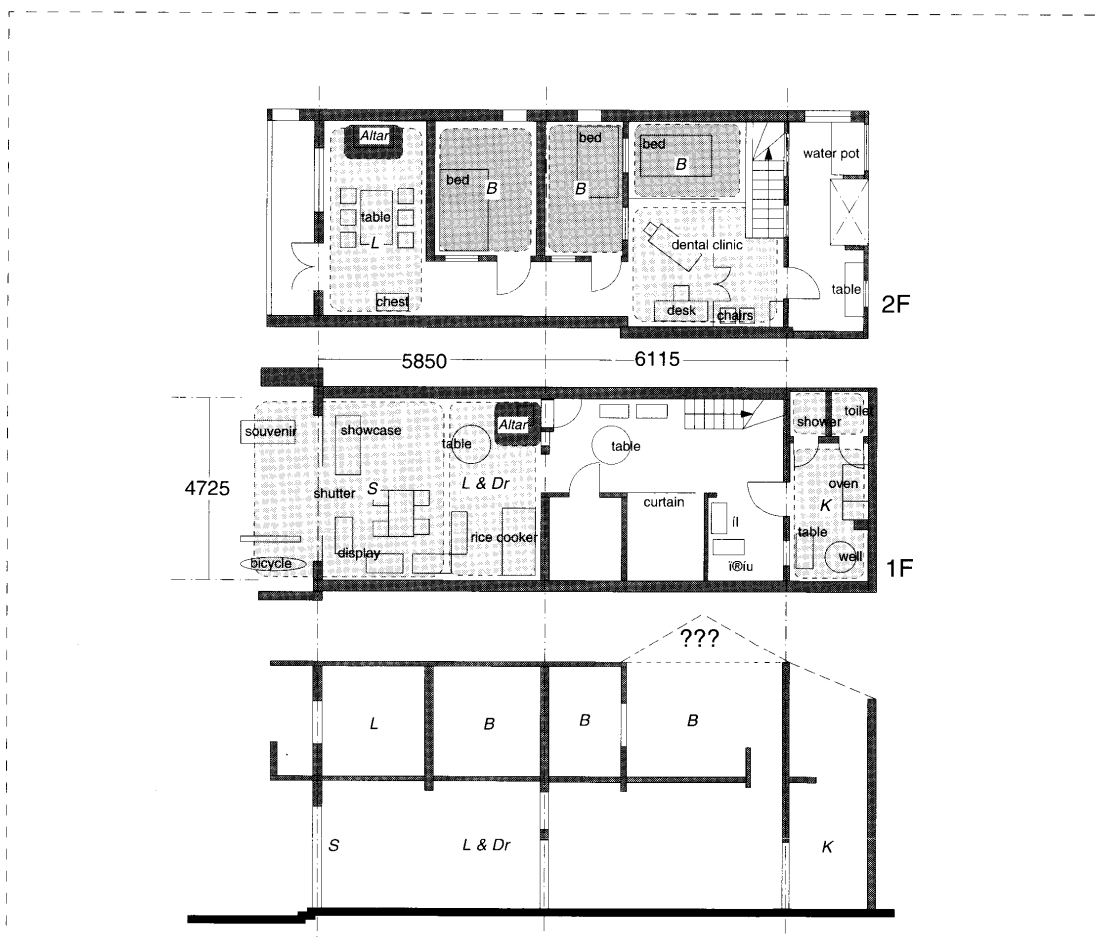


Fig. 13.7: 全建替え  
一敷地が少し大きい例  
(Tran Phu 156)



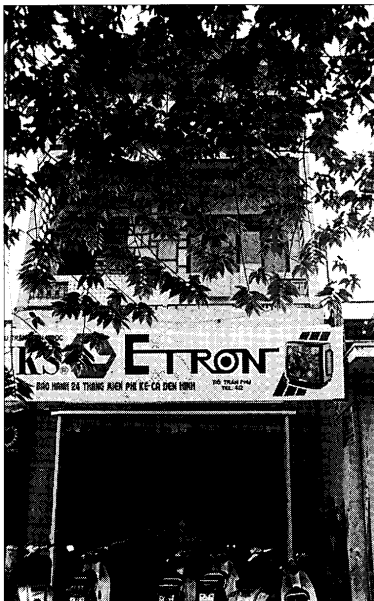
### 13.3.c. 敷地が大きい例

#### • Tran Phu 116/1973

敷地奥行きは20メートル弱。敷地いっぱいに2階建ての鉄筋コンクリート陸屋根の建物が建てられている。屋上には、柱梁を組んでルーバーが架けられており、街路からもかなり背の高い建物に見える。構成は不明だが家族数は12人である。電器店を営んでいる。

建物は奥行き方向の中央に階段が設けられ、大きく前後ふたつに分けられている。1階の前半分は店舗である。階段から後ろ半分は食事室と台所。これまでの例と異なり、台所やトイレの部分も完全に母屋に取り込まれている。2階の前半分は祭壇が置かれた大きな部屋だが、寝室にも使われている。後ろ半分には個室が並ぶ。正面は新築建物共通のパターンを踏襲している。

階段を中庭と見れば、前家と後ろ家の構成が維持されている。しかし、庭は一切失われている。



Tran Phu 116正面

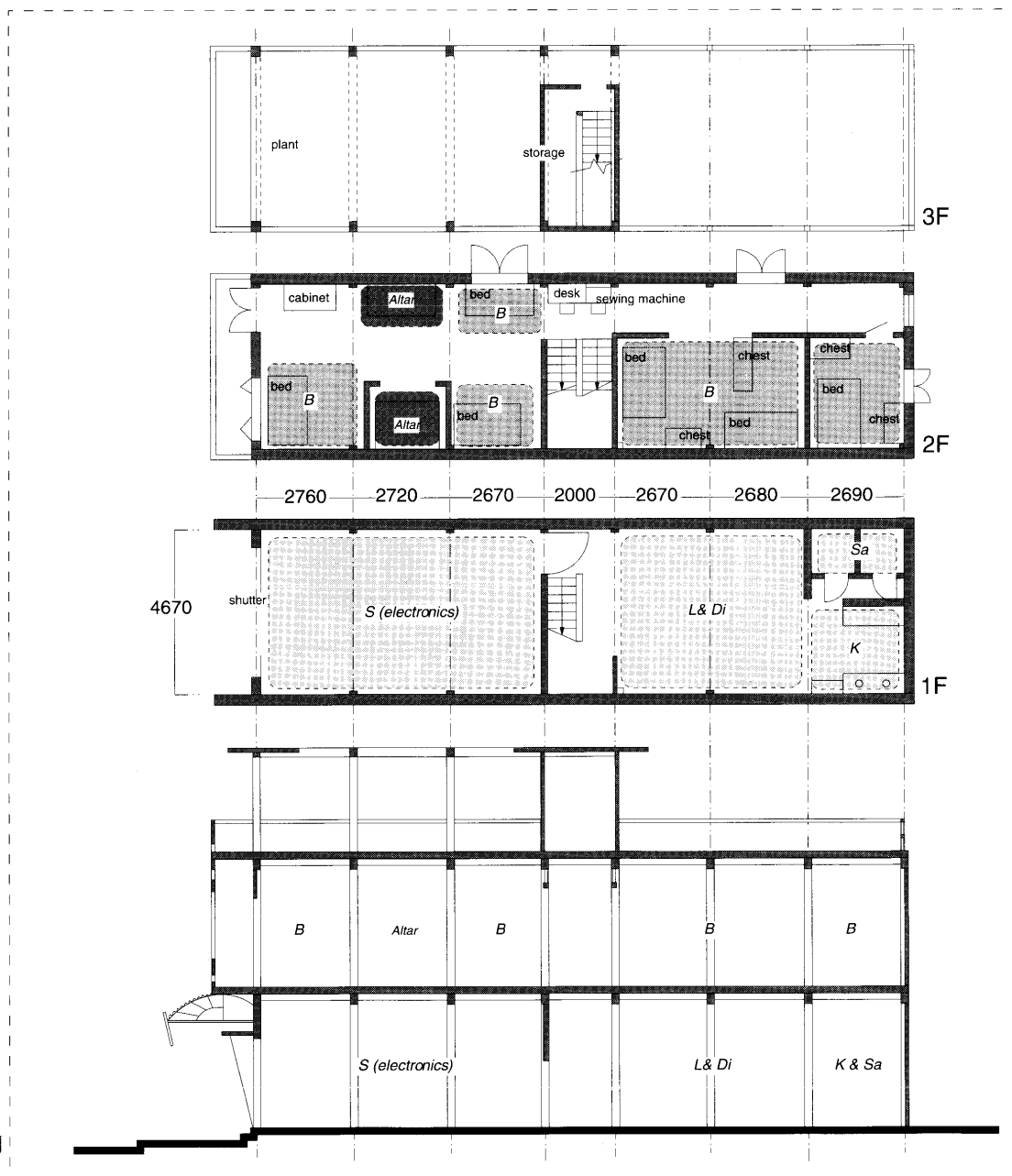


Fig. 13.8: 全建替え  
一敷地が大きい例  
(Tran Phu 116)

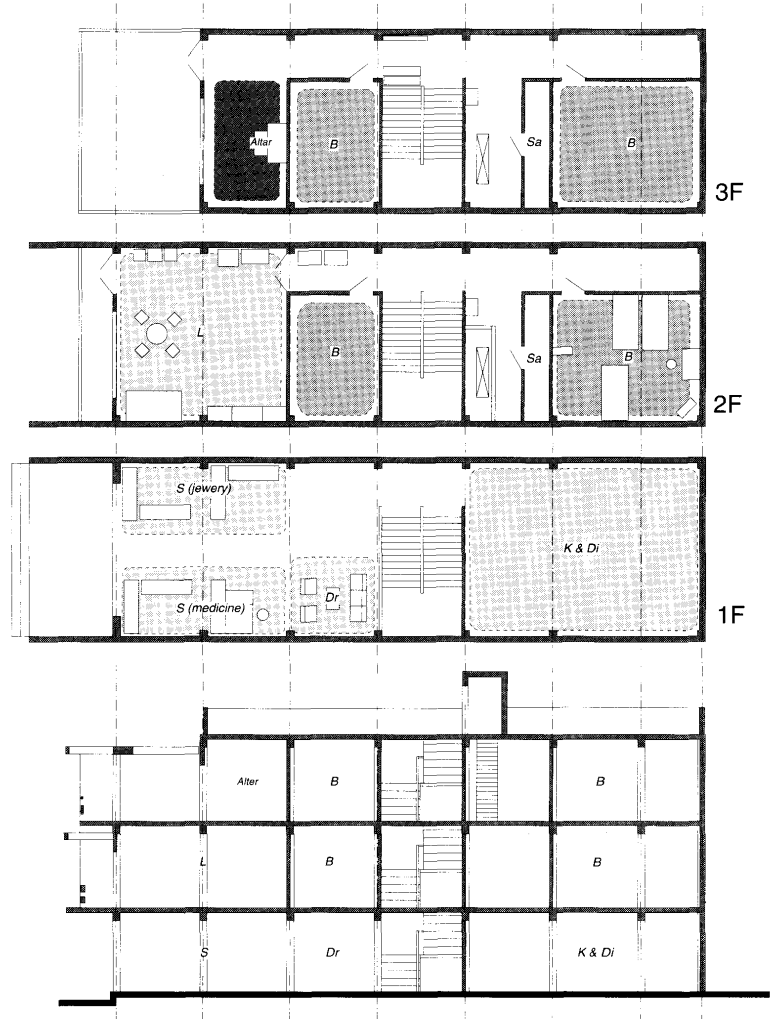


Fig. 13.9: 全建替え  
敷地が大きい例  
(Thai Hoc 68)

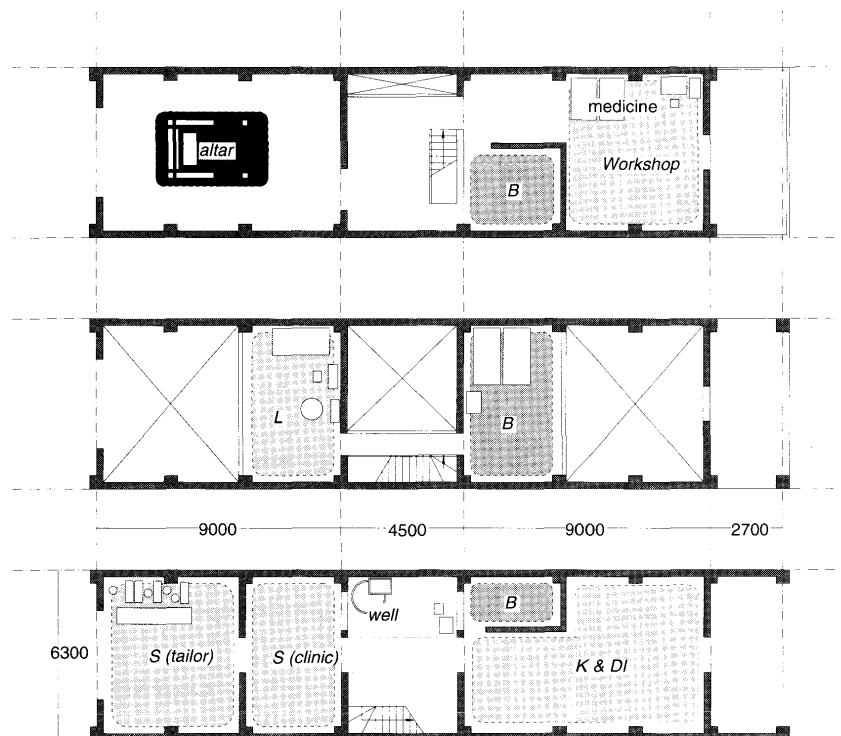
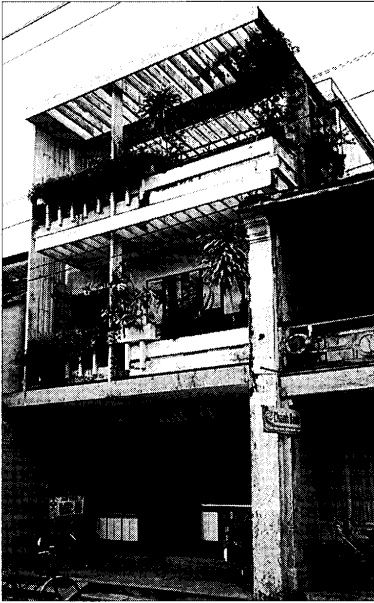


Fig. 13.10: 全建替え  
敷地が大きい例  
(Thai Hoc 89)

### • Thai Hoc 68/1970



Thai Hoc 68正面

近代建築としてはおそらくホイアン随一の華麗な建物である。敷地の奥行きは、上記116番より多少大きい程度。町並みとの調和を別にすれば、2、3階のバルコニーに設けられたルーバーが効果的である。建築年代は南ベトナム解放以前と古く、インターナショナル・スタイルのベトナム・バージョンといったところか。店では、貴金属店と薬局が間口を分け合って商売している。

建物は、敷地いっぱい建てられている。3階建てである。正面は、上記のチャンフー156番と同様、1階はシャッターで全面開放、2、3階はバルコニーへ出る開き戸と窓を組み合わせた構成である。2階以上では、バルコニーの手摺のデザインを含めて、左右対象が崩されている。

断面構成を見ると、家族の生活空間は、1階には炊事・食事室だけが残され、ほかは2階以上に置かれている。2階では、街路側が居間にあてられている点、その奥に壁際に廊下をとって寝室を並べている点も、チャンフー156番と共通している。3階も基本的には同じだ。ただし、チャンフー156番では居間と一緒にあった仏壇が3階の街路側の部屋をあてがわれている。

チャンフー156番と異なるところは、階段の位置である。奥行き方向のちょうど中央にあり、1階では、店舗と家族の空間である炊事・食事室を分けている。台所には階段沿いに屋根まで突き抜ける吹き抜けが設けられている。階段まわりは、あたかも伝統的建物の中庭相当する役割を果たしているようである。

チャンフー92番（現ホイアンホテル分館）はこの建物と似た構成である。

### • Thai Hoc 89/ 建設年不詳

さらに敷地奥行きがある例である。この奥行きでは、伝統的な建物では、前家+橋家（中庭）+後ろ家+釜家（後ろ庭）というフルセットの構成が可能である。この建物は、鉄筋コンクリート造であるが正面のデザインは特に工夫されているわけではない。店舗は仕立屋が使用しているが、主人はその奥で漢方医を開業している。

この建物も、敷地いっぱい建てられている。2階建てだが、1階の階高を高くし、中2階がとられている。奥行き方向のちょうど中央に中庭と階段室があり、伝統的建物と同様に前家と後ろ家に分けられている。中庭は3階の床が天井となっており、一部が吹き抜けているだけであるが、側面からの採光もあり、かなり明るく開放的である。

1階は前家の前半分が仕立屋、後ろ半分が診察室、後ろ家が炊事・食事室。中2階は、前家側が夫婦寝室、後ろ家側が応接室。2階は後ろ家側に明るく大きな部屋がとられている（こちらが南である）。漢方薬を干したり、金細工士である弟が作業場に使うなどに使われている。その奥に寝室が作られているが、これは上記ふたつの建物と共通するパターンだ。

2階の街路側の部屋には祖堂が置かれている。これは建て替える前の古い住宅の祖堂を、四天柱とともにそっくり移設したものである。街路側の最上階の部屋に祖堂をまつことも、上記2例と共通している。

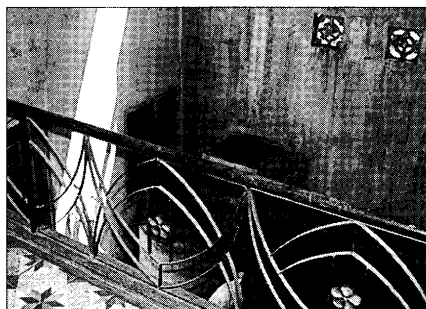
チャンフー86番（1972年）もよく似た構成の住宅である。中2階が主寝室となっている。ただし祖堂は最上階だが街路と反対側の部屋に置かれている。



Thai Hoc 89正面



Thai Hoc 89、前家1階の店舗（洋装店）



新築建物だが、前家と後ろ家に分かれ、間に中庭がある。



11階後ろ家から中庭を経て、前家、通りを見る。中2階は夫婦寝室である。

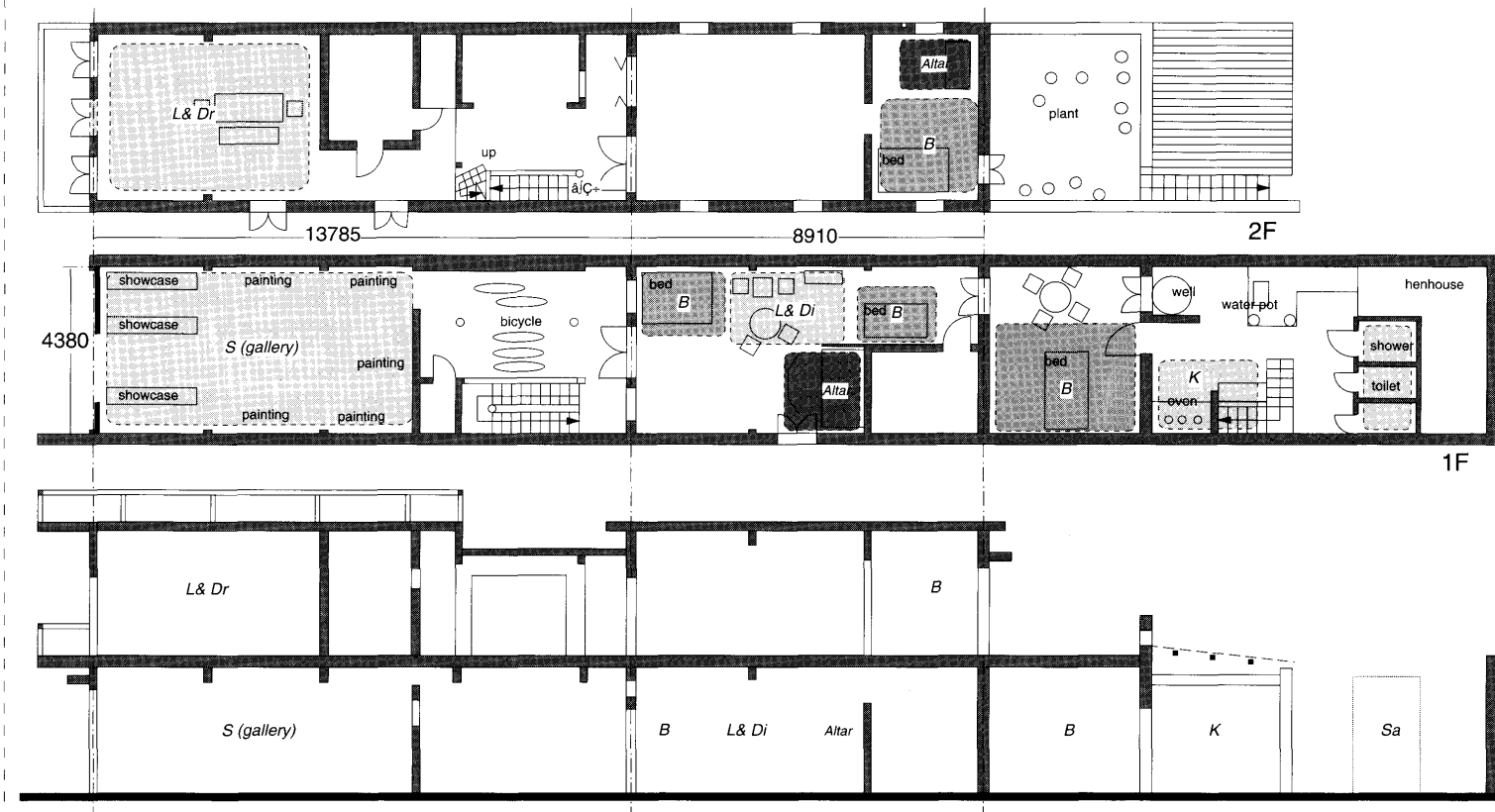


Fig. 13.11: 新しい建物だが、ファサードがシンメトリーである例 (Tran Phu 166)

Table13.2: 改築住宅の使い方

住宅タイプ	家番号	店の有無	1階の建具	2階のデザイン	2階の動線
Type-A	Tran Phu 028	あり	シャッター	非対称	確定していない
	Tran Phu 032	あり	シャッター	非対称	片側
	Tran Phu 128	なし		非対称	片側
	Tran Phu 156	あり	シャッター	非対称	片側
Type-B	Tran Phu 094	あり	シャッター	非対称	片側
	Tran Phu 116	あり	シャッター	非対称	片側
	Tran Phu 118	あり		非対称	片側 (1階の動線)
	Tran Phu 133	なし		非対称	
	Tran Phu 166	あり	シャッター	対称	確定していない
	Nguyen Thai Hoc 68	あり	シャッター	非対称	
	Nguyen Thai Hoc 89	あり			

住宅タイプ	家番号	世帯	居住者数	2階のベッド数/全ベッド数	就寝分離	個室を有する人	家族室で就寝する人
Type-A	Tran Phu 028	1	7	2/3	親子	夫婦	女子 (仏壇は別階)
	Tran Phu 032	1	4	3/5	不明	不明	なし
	Tran Phu 128	2	3	1/2	世帯	若夫婦	主人 (仏壇近い)
	Tran Phu 156	3	10	3/3	不明	不明	なし
Type-B	Tran Phu 094	3	10	3/4	世帯を超えて男女	老婦人と娘とその娘	なし
	Tran Phu 116	4	12	6/6	不明	不明	なし
	Tran Phu 118	1	4	1階建て	親子	夫婦1と子供1	なし
	Tran Phu 133	1	2	0/2	親子	親1と子供1	なし
	Tran Phu 166	1	5	1/4	不明	不明	不明
118と90を除く平均		2.0	6.6	19/29 (66%)			

住宅タイプ	家番号	世帯	居住者数	台所の位置	食事室の位置 (台所との関係)
Type-A	Tran Phu 028	1	7	1階奥の室内	壁を隔てて隣の室内 (階段近く)
	Tran Phu 032	1	4	1階奥の室内	壁を隔てて隣の半屋外
	Tran Phu 128	2	3	1階奥の室内	壁を隔てて隣の室内 (階段室)
	Tran Phu 156	3	10	1階奥の室内 (屋外だったところに屋根をかけた)	壁を隔てて隣の室内 (階段室)
Type-B	Tran Phu 094	3	10	1階奥の室内	壁を隔てて隣の室内 (階段近く)
	Tran Phu 116	4	12	1階奥の室内	隣の室内
	Tran Phu 118	1	4	1階奥の室内	中庭を挟んだ反対側の室内
	Tran Phu 133	1	2	1階奥の半屋外	壁を隔てた隣の室内 (階段室)
	Tran Phu 166	1	5	1階奥の半屋外	壁を隔てた隣の室内

## § 13.4. 新しい建物の問題点

以上の事例の観察から、新築された建物には、いくつかの着目すべき項目が見出された。いずれも改造・増築の事例でも見出されたことであるが、古い建物に規定されない改築建物ではいっそう明確にその理念が表現されているといえよう。以下、ほかの改築例もあわせて、整理しておこう。

### 生活空間、特に寝室

改造・増築住宅でもそうであったが、改築住宅では2階が積極的に寝室等に使用されている。(表4-3)

1階建ての118番を除く全8軒のうち、2階のベッド数がベッドの総数の半数以上を占める住宅が6軒である。うち2軒は全ベッドが2階にある。これを就寝の仕方で見ると、1世帯の住宅では必ず親子の就寝は分離し、親は必ず個室化できている。子供の部屋も個室化される住宅が3軒中2軒ある。2世帯以上の場合は必ず、世帯間で就寝が分離が可能な状態になっている。(世帯間の就寝分離が可能でも男女の就寝分離を優先する例もある。)世帯間で就寝を分けたとき、若夫婦は個室化され、その他の人は個室、又は家族室で就寝することになるが、老主人が仏壇のある居間で寝ることなどは、伝統的町家と同じである。

このように敷地いっぱい建てる2階建ての改築住宅の場合、就寝という点から見れば古い形式よりも確実に世帯間の就寝分離、家族間の就寝分離がなされていることが明らかになった。古い形式の住宅では実現されていなかったが、やはりそのような要求は強いものと思われる。2階に就寝空間を集めることで、1階には機能が完全に独立した店、食事室などを広く取れることになる。

ただし、2階で個室化された就寝空間は決して環境のよいものではないことは、ヒアリング調査からも聞かれている。「現在個室化された部屋で寝ているが暑いので、個室を壊して大きな家族室で寝るようにしたい」という意見もある。実際のプランでも、個室は最小限に止めているケースが多いように見受けられる。

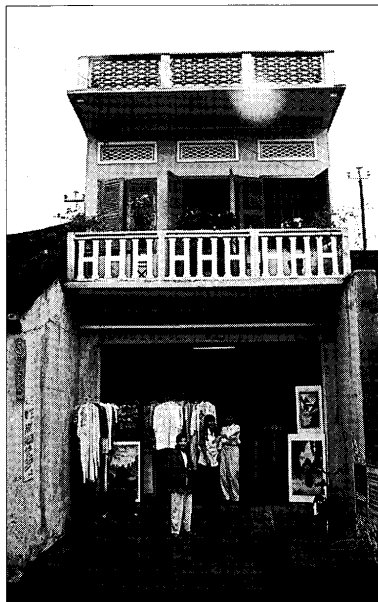
### 正面

表4-2に示すように1階の建具にシャッターを使っているものが9軒中7軒ある。それらの住宅は全て通りに接するところで商売を営んでいる。シャッターを使用していないものは専用住宅か1階建てのものである。2階建ての改築で店をもつ場合、必ず1階部分はシャッターを使用していることになる。

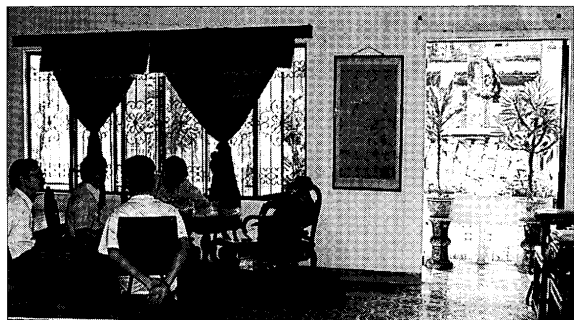
さらに1階がシャッターの建物7軒のうち6軒が2階の正面デザインが非対称である。これらの住宅の多くは2階室内の動線は片側に寄せられている。このことから改築住宅の典型として、2階建てで店を営む場合、1階はシャッター2階は非対称のデザインになる。2階のデザインは片側の動線と関連が深い。片側に動線を取るのとは中央に動線を取るより個室またはアルコーブが大きく取れるからであろう。Tran Phu 166は対象性を維持している数少ない例であるが、部屋が比較的奥行きが深い居間であるからだろう。しかし、そのような場合でも Thai Hoc 68は出入口を片側に寄せている。そのほうが落ちついたコーナーを確保できるとの判断であろうか。それとも対象性を崩そうという意識が働いているのであろうか。

### 台所と食事室

伝統的町家では後庭に設けられる釜家が台所にあたる。燃料は薪が一般的である。そのため伝統的建物では、釜家は屋根だけ又は屋根と一部の壁をもつ



Tran Phu 166正面



グエンタイホック68番の2階の居間。バルコニーへの扉は脇へ寄せ、居住空間を確保する

半屋外的な空間であった。材料を刻んだりするには、まな板を地面に置き、しゃがんで作業をする。食事は中庭にテーブルや椅子を置く場合、中庭に近い室内でとる場合などがある。

一方、新しい住宅では、表13.2に見るように建物のタイプ・家族構成に関係なく、台所は1階奥の室内に置かれる。そして食事室の位置は10例中9例が室内、そのうちの8例が台所の隣の室内にとられている。つまり位置的には伝統的住宅とほとんど変わらない。

燃料に関しては完全に電気またはガスを使用しているものは1例だけであった。薪も使いながら、台所を室内化している例が多いわけで、今後薪以外の燃料がさらに普及すれば、台所は急速に室内化する可能性がある。薪で調理する場合でも換気扇があるわけではない。にもかかわらずこれらの住宅のほとんどが室内に台所を置いているという事実は、近代設備よりも住民の新しい生活スタイルへの要求又は建築設計者の考えが先行してしまっていることを示しているといえよう。

### 一体的な建築へ

新しい建物では、前家、橋家、後ろ家、釜家など棟に分けずに、ひとつの建物の中にさまざまな機能をまとめる傾向が強い。ひとつの理由は便利さを追求したため、もうひとつの理由はRC構造で大きな空間を作る方が有利になったからであろう。このような一枚岩の建物は、伝統的な町並みに合わないばかりか、人間的な空間を作り出すのが難しい。修正すべき傾向であるといえる。

### 伝統的住宅から受け継がれたこと

一方、伝統的建物から根強く受け継がれていることもある。

特徴的なのは、神棚、祖壇などの宗教的な要素である。すでに12章で見たように、ホイアン住宅には何種類もの神棚、祖壇、仏壇がある。表13.3に見るように改築された住宅でも、古い住宅と同様のこれら要素の存在が認められる。いや、むしろ改築された住宅の方が、祭壇が多いかもしれない。

改築前後の祭壇に関して興味深い例がある。敷地全体を改築したTran Phu 116はもともと中庭のある住宅であった。その中庭は隣のTran Phu 114の中庭と壁を隔てて並んでいたため、両家は資金を出し合って敷地境界上に共有できる井戸を作った(ホイアンではたまにある行為)。その後Tran Phu 116は改築され、井戸のある中庭だったところは階段室に、便所台所などは敷地に一番奥に配置されるようになった。しかし現在も、もともと井戸のあった階段室に水の神がまつられ、改築後は電気です水をくみあげている。

左の写真は、新築に当たって、古い建物にあった祖堂をそれを囲む柱や梁も含めて、そのまま新しい建物の2階へ移した例である(この建物は中2階がある。新しい3階建ての建物では、祖堂は最上階の3階にまつられることが多い)。新しい建物でも、機能的・合理的な発想だけでは説明のつかない要素があることに注意すべきであろう。



タイホック89番では、改築に当たり、古い建物にあった祖堂とそれを囲む柱や梁を切り取り、そのまま新しい建物の2階へ移した。ホイアンでは新しい建物でもこのような空間が大切にされる。

Table13.3: 各住宅の祭壇の種類

	家番号	金	火	水	門	家	空気	五	関公	仏	女神	キリ	その他	合計	祖壇	仏壇
全改築	116	●		●							●			3	●	
	118	●	●	●		●		●			●			6		
	128	●	●								●		主聖	4	●	●
部分改築	106	●												1	別	
	112	●	●						●	●	●			5	●	
	114	住	●				●			●				3		
	132	●●	●		●						●			5	●	●
	93	●	●●											3	●	
	109	店	●										通路上	2	●	
●の数/住宅数		0.89	0.89	0.22	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.22	0.56	0.00	0.22	3.56	0.67	0.22

(参考) 改築無しの場合

●の数/住宅数	0.40	0.85	0.20	0.25	0.15	0.10	0.05	0.10	0.15	0.20	0.10	0.25	2.70	0.85	0.25
---------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

注：女神とは観音又は天后を意味する。調査では区別できないものもあったので同じ項目に表記した。キリはキリスト教